



15周年記念号



2018・8・9

SORA 80号

太宰府 山本 則男

陶枕や唐三彩の夢の色

戍人^{じゆにん}とは防人のこと夏来る

木簡にひらがなは無し夏浅し

甕棺のくれなゐ浄土ほととぎす

五月雨水城の二文字墨書土器

福岡 栗原 京子

潮風を幣がしづめて海開き

色あせていたはられをり鯉幟

隆隆と尾まで猛りて鯉幟

卓増ゆる窯元の庭花もみぢ

つつじ果てありふれた丘あるばかり

北九州 兒玉 充代

薫風やねむき児を乗せ乳母車

石越ゆる水の歡喜や新樹光

うぐひすやいつもの時刻いつもの木

余花の雨仰臥正しく寝まりけり

花ミモザ風にスカーフ解けやすく

兵庫 林 徹也

父の名の一字を胸に入園児

放課後のトランペットや夏燕

記念樹ののこる廃校柄長啼く

縄文の池我がものに通し鴨

青しぐれ医師の診断また加齢

宮崎 田代 民子

風鈴や抗ふすべもなく病みて
胃カメラを胃に汗にじむ額かな
点滴の涼しき間合ひにも厭きし
腰痛と昼の蚊に苛まれをり
シャワー全開けふの憂さ今日晴らす

直方 吉田 悦子

町内に刑事張り込む春一番
春星や本もて学ぶ心理学
抽出しに秘めたる文やサイネリア
亡き友の筭提げてくるやうな
背負ふ子にせがまれて見る鯉幟

福岡 田代 貞香

寒明けや湯気を豊かに饅頭屋
恋猫の声に絶たれし夫の夢
生まれたる蝶に青空ありにけり
刺してすぐその人に蚊の打たれけり
停車場に駅員一人花は葉に

大阪 井上 和子

薬師寺の開門を待つ春の月
金堂へ砂利軋まする花会式
練行の高き杵音山桜
鐘太鼓ひびく金堂花月夜
花冷の膝へ散華の一枚が

大阪 田岡千章

沈丁花昏るる小声で話さうよ
春燈やぬり絵に大き乙女の瞳
春宵へ解く手土産の蝶結び
春満月猫を追ひかけ猫奔る
胴長くマジックミラーの日永かな

兵庫 青木朋子

添ひ寝してくる猫みて春の風邪
大の字になりたくやつて来し春野
つぎつぎと手を振りくるる遠足児
赤ん坊に指を握られ八重桜
堤へと手を振り返す花見舟

熊本 松田明子

あとさきに蔭に日なたに花筏
ふくらます音も吹き入れ紙風船
柵のなき島の牧場や雲の峰
子つばめの声押しあひて圧しあひて
草叢に蛇立ち上がり沈みけり

直方 曾根富久恵

今生の空を見納め流し雛
向かひ合ふ墓地と桜の幼稚園
演習の部隊くろぐる鳥雲に
蛇穴を出づ声高の経聞けば
染めをれば鶯鳴きぬ手を止めぬ

岡垣 田中とし江

包丁に吸ひつく初採り胡瓜かな

病む犬に見舞の缶詰春深し

夕桜ネクタイ解いた君が来る

鶉の翔ぶや風切羽に海の青

拝殿より春光の野へ鳥礫

北海道 押田裕見子

小康の人としばらく春暖炉

いつまでも待つ裸婦像や寒戻る

瀬戸際に打ち揚げらるる浮氷

善人となる咲き満ちし花の下

夜濯のものを叩いて憂さ晴らす

兵庫 岩井京子

雨過ぎし新樹の森の香りかな

思はざる香にふり返る忍冬

いくつかはもう嘴の痕さくらんぼ

扉開くるも待つ犬の亡し朧月

亡き犬に犬の友あり夕桜

兵庫 えとう樹里

無心なれ無心よかれとキャベツ切る

そつくりのふたりの老女花蘇芳

ふらここや通天閣の灯のにじむ

園の子の手がた足がた春の泥

太閤の土塁ふつくら桜東風

直方 石橋 幾代

東京 山田 正子

黄砂降るこの世を隠し神々も

鳥ぐもり潮入り川に毬浮かび

火を焚けば情念つゝの花女郎

空耳かかごめかごめと花の下

春永し雨のしみゆく休み窯

水底の草にも蒼夏来る

編み上げてすでにいびつな螢籠

ひまはりや黒人霊歌今もなほ

またたきて見れば増えゆく螢かな

海暮れて宵待草の灯りけり

太宰府 西住 三恵子

兵庫 大西 乃子

仮の世の仮の色して夜の新樹

惜春や上りホームの発車音

夏空へダリの時計のはじけ飛ぶ

葉桜や錠の錆びつく武家屋敷

筍掘る父と子のシャツ同じ色

葉桜に耳鳴しげくありにけり

薔薇の香や白の円卓囲む椅子

青嵐駅の階段二段とび

童顔の主治医の笑窪南風

先頭は方向音痴蟻の列

東京 今井康子

せんぷうきと何度でも言ふ襦袢の子

人消えて砂紋の著き梅雨の寺

夏の窓青き作業着宙吊りに

風あるや明珍風鈴ちりと鳴り

新樹光外科病棟に笑ひ声

東京 遠山のり子

海鳴の響く砂山葛の花

月見草すぐに崩るる砂の山

青嵐御仏つつむ大きな木

雲の峰木々の緑の幾重にも

青嵐雀の脚のおぼつかな

神奈川 窪みち子

箸持ちて眠る幼な子貝風鈴

硝子窓磨き終へたる夏木かな

巢立ちせし子の残したる金魚かな

緑蔭に木の椅子ちひろ美術館

いちのはつの白き光よ母の忌来



私の代表句

鱚雲ひらがな母に教はりし

福岡

柴田佐知子

浮いてゐる体は遠し夜のプール

福岡

高倉和子

虫籠を濡らさず濡れて戻りけり

東京

中田みなみ

形代に書いて立派な齢かな

福岡

柴田志津子

十字架のイエスが踏絵ふめと言ふ

長崎

荒井千佐代

ローリエの一葉を鍋にみどりの日

埼玉

服部早苗

二度三度波打たせ敷く花蕙

福岡

岸洋子

うすものの着られて人の形なす

北九州

深川淑枝

雨降れば雨を見ながら桜餅

広島

戸栗末廣

鉦叩ひと夜を倦まず昂らず

福岡

角野良生



啓蟄や古き都は土の中

名月と同じ高さの観覧車

振つてみて笑ひたくなるさくらんぼ

仏壇のあかりのやうに桃ひとつ

逝きし身のまだやはらかし夏の月

掬はるる金魚の貌の歪みけり

黒塗りのベンツに乗りしバラの束

狼のやうな犬連れ月を見に

峰雲やA4ほどのベビー服

夕立の来さうな草の匂ひかな

嫌はるるほどは愛さず雪女

初湯してさらに男と女かな

兵庫 青木朋子

粕屋 秋 千晴

福岡 あさなが捷

京都 天谷翔子

直方 石橋幾代

大阪 井上和子

東京 今井康子

兵庫 岩井京子

兵庫 えとう樹里

兵庫 大西乃子

北海道 押田裕見子

福岡 亀井紀子

白日傘明日香歩くは恋に似て

北九州

河原敬子

独り居の部屋見廻して火の恋し

神奈川

窪みち子

壹万里泳ぎても此処金魚玉

福岡

栗原京子

星を得て植田しづかに水湛ふ

北九州

見玉充代

白足袋の糸一本で干されたる

糸島

小林朱夏

花冷や服に遺りし母の髪

直方

曾根富久恵

真剣のきつ先に立つ博多独楽

須恵

苑実耶

松の芯父性といふは瘦我慢

大阪

田岡千章

花衣脱げば花びらこぼれけり

福岡

田代貞香

折鶴のどこも鋭角星まつり

宮崎

田代民子

日盛りや野菜に種の太る音

岡垣

田中とし江

曇天の花のトンネル明りかな

東京

遠山のり子



点すならば点滴よりも苔清水

長崎

仲里奈央

海水を染めて渦巻く桜鯛

福岡

永淵恵子

ただ母に喜んで欲し豆を撒く

福岡

西住三恵子

父植ゑし柿を父へと供へけり

兵庫

林徹也

蟻螻の柱沸騰してゐたる

千葉

原友子

人形の前髪揃ふ桃の花

福岡

樋口みのぶ

春風や窓開けてとぶ飛行船

長崎

松尾龍之介

神棚をたたみて終る山開き

熊本

松田明子

母病めば子ら大人しき晩夏かな

春日

三井所美智子

惜命や術後いくたび桜咲く

糸田

宮井知英

正装は老人ばかり墓参り

大野城

森田明成

竹の子の逃げ出すやうに生えにけり

福岡

矢野百合子

お日様とチューリップ描き日本の子

福岡 山内 碧

青竹のやうな少女の藍浴衣

東京 山田 正子

野遊びの日向大きく使ひけり

大宰府 山本 則男

春夕焼母のベッドを横向きに

北九州 横田 敬子

夫の香の遺る毛布を抱きし夜

直方 吉田 悦子

はんこ屋にふしぎな名前鳥の恋

粕屋 吉田 菫

鶯の声に口笛もて応ふ

東京 石井 みゆき

家が飛び代田が飛んでゆく車窓

鳥根 石川 子熊

母の服着て母を看る冬の梅

直方 岩下 きぬ代

烏雲に渡しそびれしチョコレート

兵庫 岡村 尚子

春しぐれ遺品は茶箱二つのみ

長崎 荻 悠子

小春日の城下に競ふ四半的

宮崎 小島 翠波



転ぶ子の横を一気に運動会

福岡 後藤園子

火の散華めぐる御堂やお水取り

兵庫 佐藤和弘

千切れ飛ぶ鯛網漁の男唄

長崎 千波 悠

老いてゆく日々を等しく石路の花

福岡 野田美子

夕暮は森がふくらむ寒鴉

福岡 畑 由子

月白や湯あみの音のひそかなる

北九州 ひとみ 月

大阿蘇の風を身ぬちに青き踏む

広島 星加鷹彦

花屑と同じぬくもり幼き手

東京 本多トミ

ひらがなで語りあひたき夜長かな

春日 宮川正彦

万緑の径を歩けば旅のごとし

福岡 宮崎とみよ

厚着してしばし待たする聴診器

豊前 むつみ 蓮

飛びさうなややの髪切る柿若葉

東京 村上二三

空作品評

柴田佐知子

行く春や象の背中
の砂掃かれ

深川 淑枝

象は一度心を許して嗅いだ人の匂いを何年経つても覚えていられるという。大きくて賢くて強く、子供たちに人気だ。以前、ブラシの柄を鼻で握り自分の顔を機嫌よくブラッシングしている母親象の動画を見たことがある。掲句は動物園の景であろうか。象の背の砂を掃き落とす飼育員さんと、心をゆるして大人しく掃かれている象。囲われて人のもとで生きる象にゆつくりと時間が流れてゆく。〈行く春〉という季語の持つ情感が、实景に奥行きをもたらしている。

袋角触れてはならぬ色をして

高倉 和子

鹿の角は、晩春から初夏にかけて根元から落ち生え変わる。抜け落ちたあとに生えてくる角を袋角という。〈落し角〉は春、〈袋角〉は夏の季語である。

柵の内で飼われている鹿の袋角を間近で見たことがある。柔らかいこぶ状でビロードのような皮膚の下に血液が透け、ヒリヒリと痛そうに見えた。熱を持っているのか触つてみたかったが、鹿は警戒するし怒りそうだった。実際袋角は傷つきやすくその時期は気が立っているという。鮮明に記憶しており、幾度も作句したのだが類句の山につき当たってしまった。ところが和子さんは呆気にとられるほど真直ぐに句にされた。そうだ、私が見たのは〈触れてはならぬ色〉だった。見て感じて浮かんた言葉は同じなのに、このようにさりとて言葉を組み立てることができなかったのだ。〈触れられぬ〉であれば平凡だ。〈触れてはならぬ〉という措辞を得たことで句が抽んでくる。めぐる季節の中の命のいとなみや大地の尊厳をも思わせられる作品となっている。

俳句は短い。読む人に分かってもらおうと、何もかも詰め込んで俳句の力は発揮できない。説明や理屈を省き、言葉を削ぎ落とし端的に表現することで本質に迫ることが出来る断念の詩型なのだ。一音一字の選択の差によっても、句が呼び寄せる空間の深さや広がりが異なってくる。また褒められたりなど人の眼を気にして詠んでは、句の品格が失われてしまう。〈以下略〉

空集

柴田佐知子選

また一人村を出てゆく青田風

福岡 永淵 恵子

甘茶仏一日を濡れて細りけり
晩鐘に少し間のある仏生会

麦秋や二階使はぬ部屋ばかり

鮎たべて藻の香の息を吐きにけり

振り向かすための草矢を放ちけり

干物屋の裏に展らけて夏の海

二度鋤きをさらに均して種を蒔く

青水無月ポストに封書深く入れ

緑蔭のベンチよく拭き勧めらる

万緑や水場の鎖付きコップ

酢物にもお茶にも噎せて麦の秋

梅雨冷や読めても書けぬ字の多き

初蝶の歎ひ翅の毀れさう

母のミシン使はず捨てず昭和の日

緑さすマリアの両手外へひらく

長崎 千波 悠

北九州 深川 淑枝

遠足の子に整列の笛が鳴る
行く春や象の背中の砂掃かれ
うす紅の脚ひらひらと春の鴨
芽柳や結ばれ細る舳石

魚に打ちし塩にじみゆく青風
雑巾踏む上がり框や走り梅雨
雨の筋光りて過ぐる新茶かな
盛り上る道の真中や麦の秋

福岡 高倉 和子

蝸牛葉脈に沿ひ進みけり
袋角触れてはならぬ色をして
講堂の秒針太き薄暑かな